

大阪市下水道科学館インフォメーション

「下水道技術の情報発信」の展示コーナーがオープン

下水道科学館では、3階の「都市環境と下水道」の展示コーナーの一部を改築し、民間とのパートナーシップによる「下水道技術の情報発信」の展示コーナーを7月1日よりオープンしました。

この改築は、平成24年4月に、大阪府が国土交通省から水・環境ソリューションハブの構成団体として認定されたことを受け、下水道技術の情報発信と官民連携による海外の水環境に貢献するための広報機能を下水道科学館に付加するために行われました。既に、JICA研修など海外からの下水道関係者が視察に訪れるなど広報機能を発揮しています。

「夏休み・水と環境の教室」を開催

8月8日(金)に夏休み期間のイベントとして、小中学生を対象に、「夏休み・水と環境の教室」を開催しました。今回は、参加・体験型の多様な水質実験によって「水の特長」を身近な課題として勉強していただきました。



3階展示物の「下水道技術の情報発信」



夏休み・水と環境の教室

イベント情報

- 10月26日(日)の「休日スクール」(小学生とその保護者が対象)
 - 11月15日(土)の「水環境シンポジウム」などを開催します。
 - 11月中旬 今年度のトピックスとして、下水道関係の写真家、白汚零氏の写真展を開催予定。
- ※イベントの詳細は、ホームページ等でお知らせします。



●所在地 〒554-0001 大阪市此花区高見1丁目2番53号

●電話 06-6466-3170

●FAX 06-6466-3165

●開館時間 午前9時30分～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

●休館日 毎週月曜日(月曜が休日の場合は翌日)、年末年始

●入館無料 ●無料駐車場あり

●大阪市下水道科学館ホームページアドレス <http://www.city-osaka-sewerage-museum.or.jp/>

●アクセス

- 阪神電鉄「淀川駅」下車 徒歩約7分
- 地下鉄「野田阪神駅」下車 徒歩約15分
- JR西九条駅から市バス82号「高見一丁目」下車すぐ
- JR東西線「海老江駅」下車 徒歩約15分



Merとは

「Mer(メール)」とはフランス語で「海」を意味する言葉。命を育んだ海と、メッセージを伝える「メール(Mail)」の音を重ねています。この冊子では、これから水という大切に身近な存在を通して、私たちの暮らしと未来について考えていきます。

人と地球のうらおいマガジン・メール2014年10月号

発行 一般財団法人 都市技術センター

〒541-0055 大阪市中央区船場中央2丁目2番5号-206

船場センタービル5号館2階

TEL 06-4963-2056

<http://www.uitech.jp/>

清流紀行 P02
「滝畑四十八滝」(河内長野市)

ガイアの瞳 P04
「水環境・水文化を育む高度処理水」

水人之交 P08
「北浜の水辺のにぎわい」(大阪市)

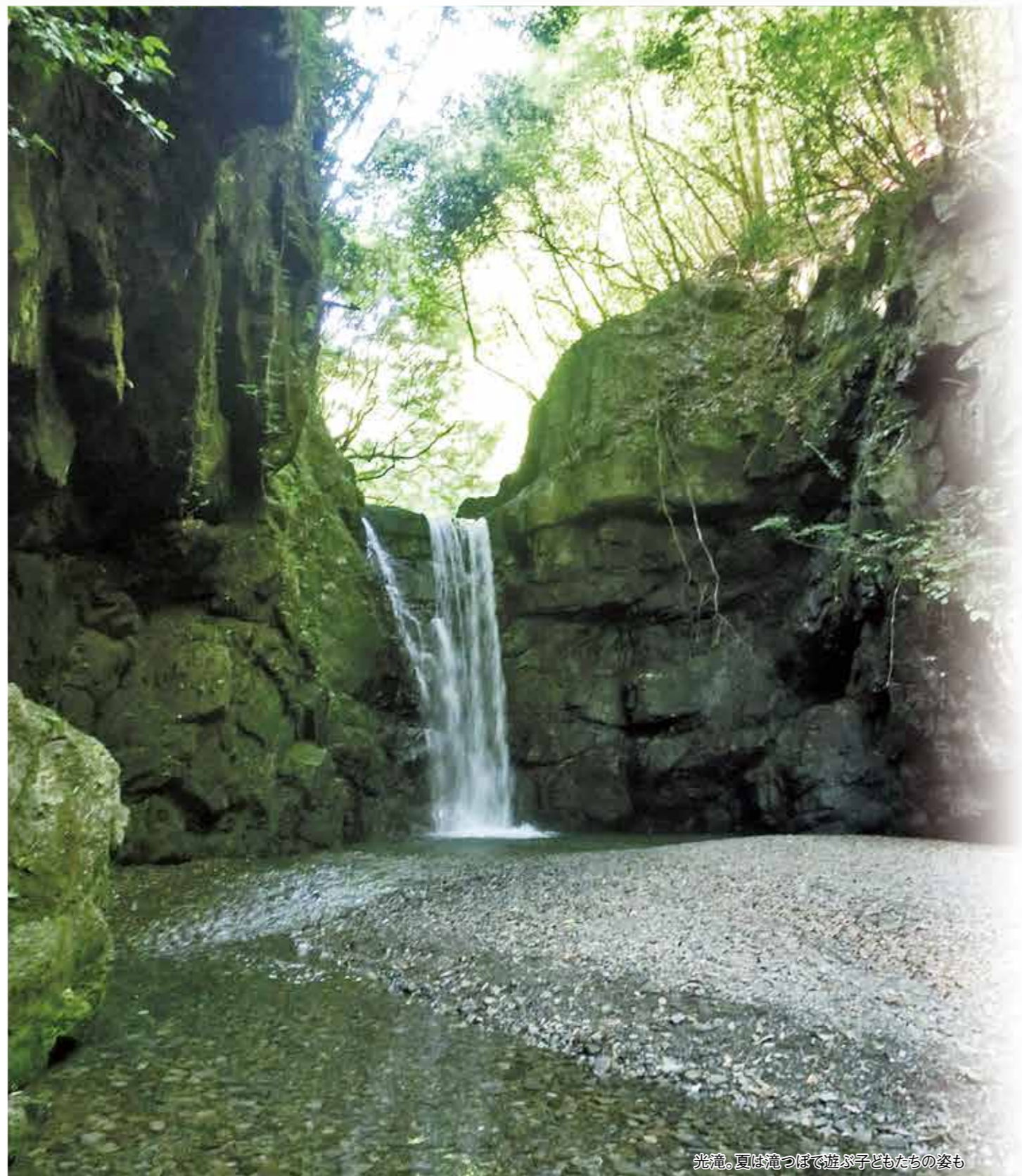
大阪府内の下水道情報 P12

センターだより P14

清流紀行

壮大な自然に囲まれて
滝めぐり

滝畑四十八滝(河内長野市)



光滝。夏は滝つぼで遊ぶ子どもたちの姿も

難波から電車で約30分、さらにバスに45分ほど揺られると、そこには大阪とは思えない大自然が広がっています。

大阪府河内長野市滝畑。夏はキャンプ地として賑わう河内エリアきっての秘境は、生い茂る緑はもちろん、和泉山脈から湧き出る豊かな水にも恵まれています。川のせせらぎをBGMに林道を歩いていると、大小さまざまな滝に遭遇。その滝の多さから、“四十八滝”の名で親しまれています。

中でも光滝寺キャンプ場の奥にある光滝は、多くの人の心を打ってきました。ドラマやCMの撮影に使われたことのある滝を目の前にすると、まるで別世界に来たかのような気分。木漏れ日によって水しぶきがきらきらと輝く光景は、日々の疲れを癒やしてくれるよう。頬に降りそそぐ天然のミストが心地よい、自然の恵みいっぱいの空間が広がります。



力強い水音が響き渡る荒滝



2つの大きな水流が交差する御光滝

す。近くには飛鳥時代に建てられ、滝の名が由来と言われる光滝寺があり、自然を全身に感じながら参拝できます。

舗装された道をずんずん歩いていくと、2つ目の大きな滝・荒滝にたどり着きます。その名の通り、荒々しく水が流れ落ちる様子は、まさにダイナミックの一言。周りの静けさと相まって、力強い存在感を示しています。滝つぼに足を浸してたたくと、時間が止まったかのような錯覚に陥るほど、凛とした空気が張りつめています。

さらに奥へと進むと、道は徐々に険しいものに。細い林道をコケヤシ

合わせて見たい「滝畑ダム」

キャンプ場に向かう道中に広がる滝畑ダムは、昭和57年に完成した大阪府最大の人工ダム。洪水調節やかんがい、上水道供給を目的とする「多目的ダム」で、



羽曳野市や藤井寺市、河内長野市、富田林市など南河内の住民の生活を支えています。緑に囲まれた周辺は、サイクリングを楽しむ人の姿もちらほら。四十八滝とセットで楽しみたい光景です。

ダをかき分けながら進めば、落差15m程の御光滝が目の前に現れます。運が良ければ、太陽の光が滝に差し込む神秘的なシーンが見られることも。その優雅な光景は険しい道のりを歩いた者にだけ与えられる、特別なごほうびです。

滝畑の滝は、他にもたくさん。可愛らしくちろちろと流れる稚児滝、ふたつの滝が仲良く寄り添う夫婦滝、最奥にあり人知れず流れ落ちる大滝、名もなき小さな滝の数々……。

「この先には、どんな滝が待っているのだろうか」。そんな楽しみが湧き出る自然の宝庫が、そこにはありました。



場所／大阪府河内長野市滝畑1392-甲(光滝寺キャンプ場)
アクセス／南海バス「滝畑ダム」下車、徒歩約20分

ガアの瞳

水環境・水文化を育む 高度処理水

24時間休むことなく、雨水の排除や汚水の処理を続ける特長から、かつては都市における「静脈」と例えられていた下水道。今では健全な水環境と資源循環を創出する「動脈」として期待されています。

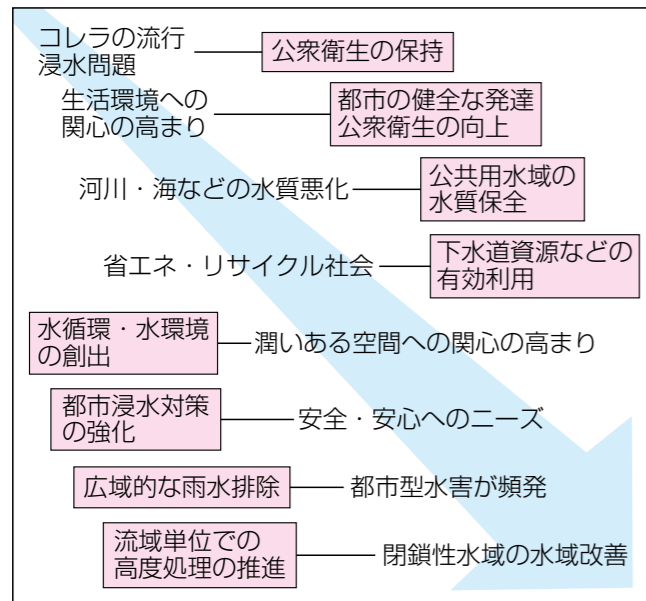


鴻池四季彩々とおひ (東大阪市)

多様化する下水道の役割

江戸時代以前における下水道(排水溝)の目的は、主に雨水の排除であり、道路の側に溝が設けられた7世紀の藤原京や平城京、背割り下水(太閤下水)が整備された中世の大坂のように、排水を考慮した都市が形成されてき

日本における下水道の役割の変遷



ました。藤原京や平城京では、下水道(排水溝)にし尿が捨てられていましたが、し尿を肥料として利用する社会システムが確立した鎌倉時代以降は、排水溝にし尿が流れることは少なくなったといわれています。

ところが、明治時代に入り化学肥料が普及すると、農業にし尿を用いるシステムが崩壊。都市部への人口集中もあり、行き場を失った汚水により環境が悪化し、コレラなどの伝染病が流行しました。そのため、東京や横浜、大阪などの大都市では、近代的な下水道整備が進められるようになりました。

下水道が次の大きな転機を迎えたのは、戦後の高度経済成長期です。工場排水や生活排水による水質汚濁がクローズアップされ、下水道は水質の改善・保全を行う砦として、大きな期待を寄せられるようになりました。この頃から国を挙げての普及拡大が強化され、昭和40年度末には8%だった下水道普及率が、平成元年度末は42%、平成25年度末には77%に向上。さらにこの間、経済の発展や暮らしの変化に伴う社会的ニーズを受け、下水道は公共用水域の水質改善のほかに、下水処理で発生する汚泥の再利用やエネルギー化、震災やゲリラ豪雨による被害を軽減する都市インフラとして注目されるなど、多様

な役割を担うようになっていきました。

一方、普及率の向上に比例して、下水道に流入する水量が増大すると、高度処理技術の開発と普及もあり、下水処理水は水資源としての価値が高まってきました。本来、高度処理は水源となる地域や、大阪湾のような閉鎖性水域の水質改善を目的に導入された処理法ですが、天候に関わらず安定して一定量を供給でき、さらに良好な水質であるというメリットに多くの自治体などが着目。さまざまな形態へ再利用されるようになりました。

現在、高度処理水は日本各地で、水洗用水や散水用水、融雪用水などに活用されています。また、市街化に伴って埋め立てや暗渠化された水路の復活や、人々がにぎわう新たな水辺空間の創出などにも活用されており、地域の特性や高度処理水の可能性を模索した取り組みも進められています。

高度処理水を使った、自然へ回帰 新豊島川(豊中市)

ホテルが飛び交う憩いのせせらぎ。毎年6月に「ホテルの夕べ」が開催される新豊島川は、高度処理水が流れる人工の水路です。

北に大阪国際空港、西に猪名川が流れる豊中市南西部には、かつて南北約3kmにおよぶ豊能南部排水路と呼ばれる農業用排水路の周辺に、のどかな田園風景が広がっていました。しかし、名神高速自動車道や中国縦貫自動車道、阪神高速道路をはじめとする道路整備が行われると、昭和40年代後半から流通拠点としての開発が進み、水田は倉庫や工場へと変貌。用水路から雨水排除の水路となった豊能南部排水路は、下水道雨水幹線として整備されることとなりました。

それまでの下水道整備は、水路を暗渠化し、その上に道路といった利便性の高い公共施設を整備することが一般的でしたが、一方では潤いある生活環境を望む市民



「手づくり郷土賞」を受賞した新豊島川



虫ドーム。平成22年にリニューアルされました

ニーズが高まりつつある時代でもありました。そこで豊中市は、親水性の高い水辺環境づくりを実現するために、「虫舞い飛び自然の親水水路創造」を計画。昭和61年、暗渠化した豊能南部排水路の上部空間に、原田下水処理場の高度処理水が流れるせせらぎ「新豊島川」を整備しました。

自然石を巧みに配置したせせらぎの側には散策路が設けられ、四季折々の花と緑を楽しむことができます。平成2年には第2期事業も完成し、多目的広場やテラスも配置。散策や魚釣り、虫とりなど、多くの方が楽しめる空間となりました。また、新豊島川の中ほどに設けられた「虫ドーム」では、平成元年から毎年6月に豊中市の職員が人工飼育したホテルを公開する「ホテルの夕べ」が開催されています。「下水道のPRを目的に始めたホテルの夕べには、天候に左右されますが毎年約4000人もの方が訪れます。過去には下水道PRとしての目的は終えたとの判断から廃止を検討したこともありますが、市民の皆さんから存続させて欲しいとの強い要望を受け、現在も『ホテルの夕べ』を開催しています」と新豊島川の維持管理を行う、豊中市都市基盤部水路課の野口さんは話します。

整備から20年を過ぎた新豊島川。高度処理水が流れる人工の水路は、市民の暮らしに潤いを与えるせせらぎとして、街に溶け込んでいます。



「甕の水100選」にも選ばれています



御殿山土地改良区の方から稲作の話聞く子どもたち



苗を植える児童たち



今年も多くの小学生が参加しました



下水道について学ぶクイズ

地域の絆を育んだ、稲作への挑戦 なぎさ米(枚方市)

枚方市と交野市の家庭下水や工場排水を処理している渚水みらいセンターでは、高度処理水を活用した稲作に取り組んでいます。

循環型社会の形成および、リサイクル推進の一環として稲作試験が始まったのは平成13年。枚方市の御殿山土地改良区とタイアップして、5年間にわたり生育、収穫量、水質などについてのモニタリングを実施しました。「結果は非常に良好で、処理水が稲作に利用できるという判断になりました」と大阪府東部流域下水道事務所の片田さんは話します。そして実験の終了と同時に、平成18年度より「体験田」として新たにスタートしました。以来、今日に至るまで、小学生による田植え、収穫、試食の取り組みが続けられています。

農作業の合間には、クイズなどを通じて下水道に関する

啓発活動も実施。多くの子どもたちが、はじめての農作業を楽しむとともに、下水が綺麗になる過程や下水道の重要性などについて学んでいます。子どもたちからの反応は、「水を汚すのは簡単だけど、綺麗にすることは大変だと分かった」「ぬかるみに入って、田植えは難しかったけれども楽しかった」など好評で、試食会は御殿山土地改良区の方とのコミュニケーションを図る、地域にとって大切な場となっています。

体験田について、片田さんは「府関係者だけでは、決して実現できない取り組みです。水田の管理やお世話をしてくださる御殿山土地改良区の皆さんや、小学校の先生方、さらに枚方市や地元議員の皆さんのご理解・ご協力あってこそなんです」と話します。今年で9年目を迎えた体験田の取り組み。下水処理水の農業用水への活用という視点だけでなく、小学生への環境学習、地域の人たちを結ぶ輪の中心として、これからも体験田はあり続けます。

歴史的水路の復活と多目的利用 鴻池水路(東大阪市)

高度処理水を活用した水辺環境の整備により、歴史ある水路が復活した例もあります。

東大阪市の鴻池水路は、江戸時代に拓かれた鴻池新田へ農業用水を送る水路として、250年以上にわたり貢献してきました。しかし、都市化や下水道整備が進むと、生活排水や工業廃水が流れ込み、悪臭や害虫発生の温床となっていました。そこで東大阪は、平成8年から8年の歳月をかけて、鴻池水みらいセンターの高度処理水を活用したせせらぎ水路と遊歩道を整備。約3kmの「鴻池四季彩々とおりに」が誕生しました。

歴史エリア、ふれあいエリア、浄化施設エリアから形成されている鴻池四季彩々とおりにには、鴻池新田の歴史や



長屋門を配した歴史エリア



せせらぎが流れる鴻池水路



「いきいき下水道賞」受賞の記念プレート

四季折々の自然を感じられる演出が随所に施されています。また、地下には下水管と処理水の貯留槽、中鴻池調節池が埋設されており、防火用水や渇水時の雑用水に利用できるほか、雨水を一時的に貯留することで水害の緩和に役立っています。

整備を担当した東大阪市下水道部の大田さんは「鴻池四季彩々とおりの特長は、水辺空間の創出だけでなく、街の安心・安全に貢献するなど下水道資源を多目的に活用していることです。整備にあたっては、市民の皆さんへの説明や工事の交渉、担当部局との調整など、なかなか苦労しましたが、やりがいのある仕事でしたね」と当時を振り返ります。

整備後も、勾配の少ない鴻池水路の水を円滑に流すため、数カ所に設けられたポンプの点検や、浄化施設や街灯、植樹などのメンテナンスが必要です。「それらの作業も大変ですが、地域の皆さんにもっと利用していただき、親しんでもらいたいですから」と大田さん。その願いの通り、散策やウォーキング、通学路として利用する子どもたちの姿が日常の風景となっている鴻池四季彩々とおりは、今では地域に欠かせない存在になっています。



東エントランスゾーン

このような取り組みは、全国各地で進められています。本来は見えにくい下水道が「人々に見える下水道」へとなるたびに、地域の新たな絆が生まれる一。高度処理水の活用は、下水道が生み出す未来への可能性を感じさせる取り組みです。

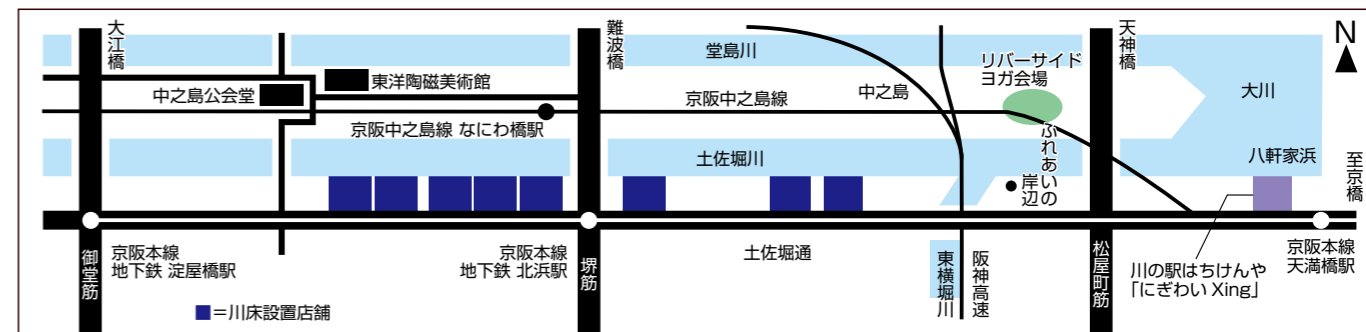
水交

すいじんの
まじわり

北浜の水辺のにぎわい

(大阪市中央区)

船場で最も北にある水辺を意味する「北浜」。古くは多くの船が行き交い、川辺に軒を連ねる料亭や旅館に小舟を着ける粋な光景があったと言います。しかし、時代が流れ、いつしか人と川は遠い存在に。そんな状況を嘆き、新たな水辺の魅力を提案しようと、立ち上がった人々がいます。



北浜テラスマップ

いまも変わらない、心地よい空間

2014年現在、土佐堀川沿いの8つの飲食店に設置されている川床。北浜テラスと呼ばれる一帯は、水辺特有の心

地よい風を感じながら食事やカフェが楽しめるとあって、若い女性を中心に人気が集まっています。ここに川床が作られたきっかけは、大阪府等が開催したイベント「水都大阪2009」。志を同じくする3つの団体会い、話は想像をはるかに越えるスピードで具体化しました。

「以前から北浜の水辺を活性化させたいと思っていた」という北浜水辺協議会の山根秀宣さん。「川床のアイデアを聞いた時は、おもしろそうだと感じました。川の上でビールが飲めたら、最高だ!その思いが、一番でしたね」と、笑顔で振り返ります。川床の常設に向けた前年の社会実験では1カ月で2000人も訪れ、あまりの反響に驚いたといいます。

「問い合わせの電話が鳴りやまず、電話を冷蔵庫にしまった店舗もあったとか(笑)。どの店舗も大盛況のうちに社会実験は幕を閉じました。川にニーズがあることが分かりましたし、汚れている川というネガティブな印象も、おしゃれで心地よいとポジティブに変わってきていると感じました。北浜はどうしても証券の街というお堅いイメージが強い。そこに、水辺の街というにぎやかなイメージをプラスすることができれば」と山根さん。川床から聞こえる楽しそうな笑い声が、オフィス街を明るく照らすスパイスになりはじめています。



朝・昼・晩で違った表情を見せる大川



2014年の川床開き(川床安全祈願祭)の様子



リバーサイドヨガ

川のゆらぎを全身で感じて

天満橋にスタジオを構えるヨガ教室・生活ヨガ研究所は、水曜日と土曜日の週に2回、中之島公園で野外ヨガレッスン「リバーサイドヨガ」を開いています。講師の珠数孝さんは、屋外でヨガをと考えた時、すぐに北浜・中之島エリアが思い浮かんだそうです。「中之島かいわいは、自然な曲線が多くて落ち着きを感じます。大川の波の曲線もそのひとつですね。どこかゆったりとした時間が流れているのは、オフィス街を包み込むように、自然が溶け込んでいるからだと思います」。

また、ヨガと川は通ずるものがあると珠数さんは話します。「心地の良い空間を作り出すには、視界に入れるだけで癒やされる『対象物』を見つけることが大切です。それは空であったり緑であったり、人によってさまざまですが、水も大きな可能性を秘めています。ヨガにおいて水は無常を感じられる存在で、流れはとても大切なものと考えられています。水は一秒たりとも同じ場所にとどまるこ

とはありませんが、川はそこにあり続けます。草や丸太などの漂流物を見ると、下流でも上流の気候が何となく把握でき、他の地域とのつながりを感じることができますよね。流れやつながりを目に見て感じとれる川は、ヨガと似ている部分があるのです」。

ゆるやかに流れる川を眺めながら、青空の下でゆったりと身体をほぐす——、新しい川とのつながり方が、北浜にはありました。

川が目前にあるぜいたくを伝えたい

天満橋駅から徒歩少し歩くと目にとまる変わった形の建物。「川の駅はちけんや」と名付けられたこの施設は、さまざまな水辺の遊びを提供しています。近くの八軒家浜から発着する大阪の有名スポットを巡る定期観光船「アクアライナー」、専用の板に乗って大川の水上散歩を楽しむ「シティサップ」、2本のポールをつきながら水辺や大阪の街を歩く「ノルディック・ウォーク」、新鮮な魚介類が手頃な価格で手に入る「天下の台所八軒家浜市（月1回開催）」、大川の絶景を目の前においしい食事とビールがいただける「Xing GARDEN」……。ここには、川の魅力とワクワク感がたくさん詰まっています。



川の駅はちけんや

施設の運営に関わる「にぎわいXing」の岸田俊徳さん（大阪水上バス）は、川の駅はちけんやが「いろんな興味のフックになれば」と話します。「北浜の水辺における一番の魅力は、大川が目の前に広がっていること。堤防で川と人が隔てられている区域が多い中で、水を間近で感じられる環境は、とてもぜいたくなものなんです。その素晴らしさを、もっと多くの人に知ってもらいたいですね。昔は船に乗って梅田やミナミに遊びに行っていたという話を聞きますし、川と人の関係はそうであるべき。本来の水辺の姿を垣間見るよう、水と密着した生活が送れるように、少しでもみなさんが川と近づききっかけとなる施設にしたいですね」。

目指すは、自然と人が集まるにぎわい空間

さまざまな視点から水辺の魅力を再発見し、にぎわいを取り戻しつつある北浜ですが、みなさん口をそろえて、まだまだ通過点にすぎないと言います。

北浜水辺協議会の山根さんの夢は「船が自由に行き交い、他の地域にも遊びにいける水路網を作ること」。北浜テラスと同時に、船着き場の建設にも関わった経験から、かつての北浜がそうであったように、ボートで乗り付けてテラスに遊びに来られる環境を整えたい、と目を輝かせます。

生活ヨガ研究所の珠数さんは「中之島をヨガの聖地にしたい」と意気込みを語ります。ヨガに興味がない人も「北

浜に来たなら、ヨガを体験しなくっちゃ!」と思ってもらえる空間を作りたい。優雅に流れる大川の素晴らしさを、より多くの人と共有したいとビジョンを膨らませています。

「昔は川沿いの遊歩道は薄暗く、誰も近づかない存在でした。しかし、川の駅ができて明かりがとると、自然と人が集まるように。今では犬の散歩をする人や一人でジョギングする女性の姿も見られます」と語るにぎわいXingの岸田さん。より身近に、散歩がてら、ふらりと立ち寄れる場所にしたいと教えてくれました。

それぞれの活動は違っても、「北浜の水辺の素晴らしさを広めたい」という思いは一つ。これからも水都大阪の中心部として、大阪の水辺をもっと盛り上げてくれることでしょ。



八軒家浜を出発した観光船大阪水上バス「アクアライナー」



シティサップ



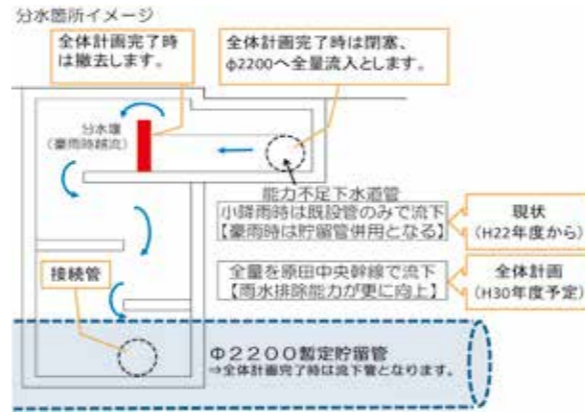
ノルディック・ウォーク

豊中市 浸水シミュレーションを活用した 早期被害軽減対策

平成18年8月22日に発生した、時間110ミリの集中豪雨による浸水被害を受け、豊中市では早期の被害軽減対策を立案するために、浸水シミュレーションを実施。下水道管からの溢水について、必要な削減量を解析しました。

この結果をふまえ、浸水常襲箇所の早期対策を図るために、通常は下流から流下管の整備を行うところを、原田中央幹線の上流部を先行して築造する工程に変更。平成22年度より暫定貯留管として供用しています。

昨年8月25日に起きた集中豪雨は、下水道計画降雨を上回る時間66ミリの降雨を記録しましたが、対策地域における被害報告はなく、効果が確認されました。現在、さらなる浸水被害の軽減のために下流部の整備に取り組んでおり、貯留管を流下管とする全体計画は、平成30年度の完成を目指しています。



高石ポンプ場 合流式下水道改善施設の供用開始

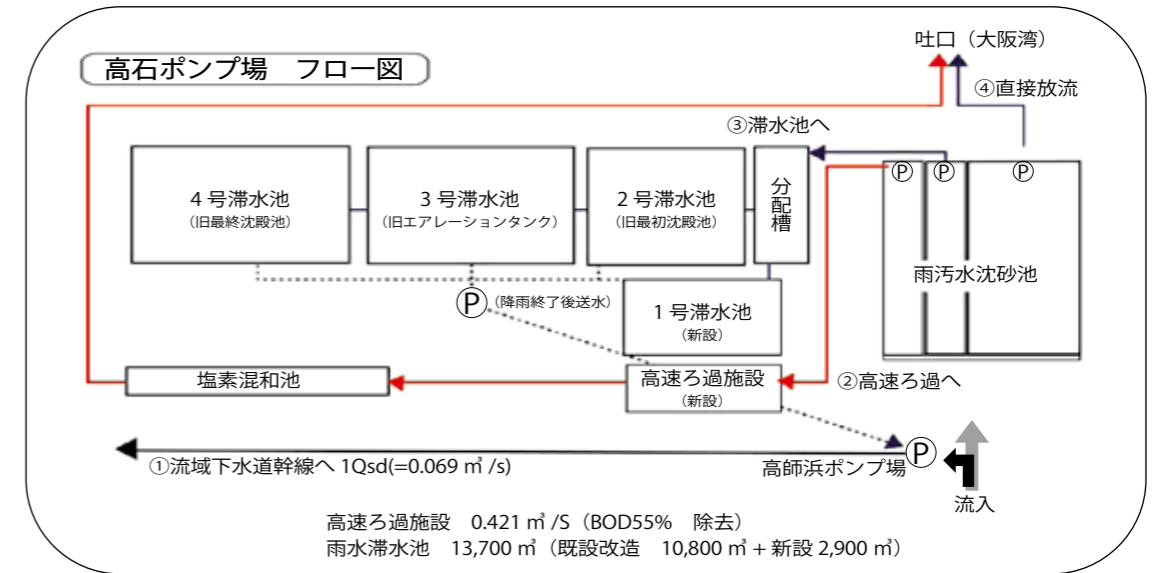
高石市の下水道区域の合流改善事業は、平成17年に策定された緊急改善計画に基づき、泉北環境整備施設組合により平成25年度末に事業を完了。平成26年4月からは合流式下水道改善施設が高石市に移管され、供用開始しています。

高石処理区が流域下水道区域に編入されることに伴い、廃止される下水処理場施設は「雨水滞水池施設」として利用し、雨天時に流入する雨水は高速ろ過施設で処理され、大阪湾へ放流します。また、ろ過能力を超える雨水は滞水池に貯留され、降雨後に流域下水道管渠へ返送。高度処理されます。

これらの施設の供用により、雨天時未処理下水の放流回数や汚濁負荷量が削減され、公共用水域の水質汚濁や悪臭の発生を抑制することができます。



- 分流式下水道区域(流域関連公共下水道区域)
- 合流式下水道区域(流域関連公共下水道区域)



高速ろ過施設



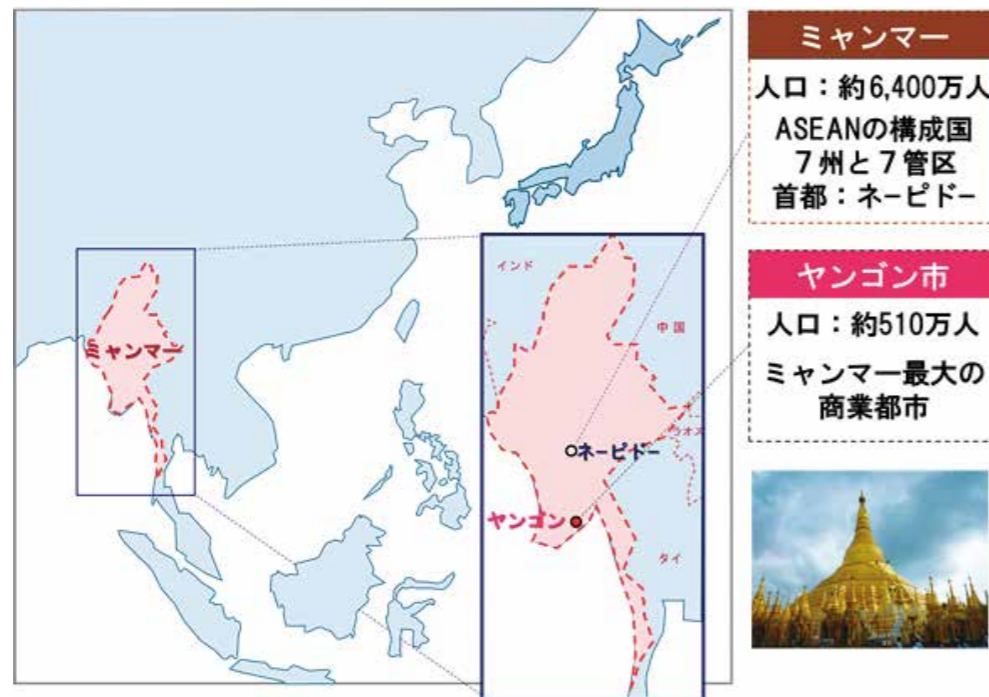
雨水滞水池

ミャンマー国・ヤンゴン市での取り組み

ミャンマー連邦共和国は、軍事政権の下でインフラ整備が遅れていましたが、2011年の民主化以降、市場経済化に向けて発展。豊富な資源と6,400万人の人口を抱える潜在的な成長力が期待されており、アジア最後のフロンティアとして注目を浴びています。

現在、水をはじめ社会インフラ開発に関するさまざまなプロジェクト等が計画・実施されています。日本からも、首相の現地訪問を契機として政府からの支援が拡大しているほか、民間企業の現地への進出の動きも加速しています。

◆ミャンマー国・ヤンゴン市



大阪市では2012年よりミャンマー国の最大都市であるヤンゴン市において、下水道や都市排水の分野において技術交流等を行ってきましたが、これを更に発展していくため、ヤンゴン市と水・環境及び都市開発などにおける主要分野への協力に関する覚書を2014年9月25日にヤンゴン市にて締結しました。この覚書に関する取り組みとして、都市技術センターでは大阪市や民間企業と連携し、ヤンゴン市の下水道管理局を対象に、点検、清掃、修繕等、管渠の維持管理について技術協力を行うプロジェクト(JICA草の根技術協力事業)を2016年度までのスケジュールで行っていきます。



現地雨水排水路の状況
(雑排水が直接川に放流されている)



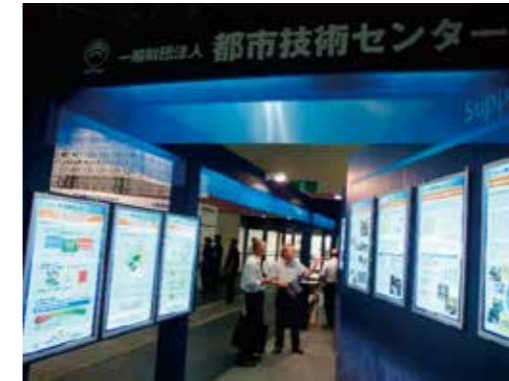
ヤンゴン市での都市間連携署名式
(2014年9月25日)

下水道展 '14大阪が開催されました

7月22日から25日まで、大阪では8年ぶりとなる下水道展が、インテックス大阪において開催。期間中は85,720人もの方が来場されました(主催者発表)。

下水道展は下水道に関わる人々が一堂に会し、最新の下水道技術や情報に触れ、そして交流を深める場であるとともに、下水道に普段なじみの無い一般の方々にも楽しいイベント等を通じて下水道の事を知っていただく場となっています。

全国の多くの自治体では、浸水対策や未普及解消、長寿命化対策さらには未利用エネルギーの活用など、数多くの課題にチャレンジされています。下水道展会場に出展した民間企業や各種団体から、こうした課題にソリューションを提供できる最新の技術や、様々な業務サービスについて紹介がありました。今回は都市技術センターも初めて単独で展示ブースを出展。大阪市や近隣都市での当センターの取り組み状況などをパネルや映像で展示し、ご来場いただいた自治体の方々や交流する中で、我々の経験やノウハウをお伝えするなど、意見交換をさせていただきました。



都市技術センターの展示ブース



大阪市の展示ブースと豪雨体験コーナー

また、大阪市をはじめ自治体等が展示するパブリックコーナーでは、当センターが大阪市建設局と連携し、一般の市民の皆さんに「豪雨体験」をしていただくコーナーを設けました。豪雨を体感していただくことで、大雨からまちを守る下水道の重要な役割について知っていただきました。



紙面に関するご意見・ご感想をお聞かせください

「Mer」では、大阪府下を中心とした下水道情報を織り交ぜながら、水そのものや水環境、都市環境、水にかかる生産活動などに関する幅広い分野の情報を掲載しております。当センターでは、この「Mer」のより一層の紙面充実を図るため、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。関心を持った記事や取り上げてほしい内容・場所・地域などをご記入ください。

応募方法 メール・FAX・ホームページにて
 メール: info@owesa.jp
 FAX: 06-4963-2095

都市技術センター

本書を作成するにあたって、参考にさせていただいた資料一覧

- 東大阪市「下水道の計画について」パンフレット
- 東大阪市「鴻池四季彩々とおりエリアご案内」パンフレット
- 東大阪市上下水道局 定例記者会見資料
- 豊中市「新豊島川」親水路事業」パンフレット
- 豊中市「蛍の里」パンフレット
- 秀和システム「水の雑学がよ〜わかる本」
- 阪急コミュニケーションズ「下水道のチカラ」
- 平成19年度 大阪湾流域別下水道整備総合計画
- 日本水道新聞社「水道公論」第50巻第7号
- 国土交通省ウェブサイト
- 社団法人 日本下水道協会ウェブサイト
- 大阪府ウェブサイト など